

今年も第92回選抜高校野球大会いわゆる春の甲子園が行われる。今年には福島県から磐城高校が46年ぶりに出場する。春は3回目、春と夏を合わせると10度目の甲子園出場となる。前回の甲子園出場は、1995年の夏の大会であった。25年ぶりにコバルトブルーのユニフォームが甲子園に戻ってくる。

磐城高校野球部と言え、1971年（昭和46年）に、小さな大投手と呼ばれた田村隆寿投手を擁し全国準優勝に輝いた記憶が蘇ってくる。

田村投手は、湯本第二中学校時代は投手として活躍し、県大会で3位になっている。中学卒業後に1年浪人し、磐城高校に入学した。入学当初は内野手であったが捕手に転向し、高校2年の夏の甲子園では5番、捕手として出場している。1回戦で準優勝したPL学園高校に1-2とサヨナラ負けしたが、田村選手は2安打と奮闘している。秋になり新チーム結成後も捕手であったが、途中から投手に転向した。シュートとシンカーを習得し、夏の甲子園では4番、投手として2年連続で甲子園に出場した。

特筆すべきは、この夏の甲子園での活躍である。2回戦から登場し、まずは優勝候補の日大第一高校に対して三塁を踏ませず1-0で4安打完封した。準々決勝では静岡学園高校を5安打完封3-0で下した。準決勝では、郡山高校を相手に8安打されながらも要所を抑え4-0で完封した。27イニング連続無失点で迎えた決勝の桐蔭学園高校との試合では、0-0から7回裏に34イニング目の初失点を喫した。結局この失点が甲子園唯一の失点となり敗れた。当時、165cmの上背からの投球は鮮烈な印象を与えた。

高校野球では、よく優勝旗が白河の関を越えないと言われた。昭和46年に磐城高校が準優勝となり、その当時は、東北、北海道のチームが全国で優勝する日も近いと思われたことであろう。しかし、その後も東北のチームは全国で優勝してはいない。何度か決勝までは行ったが、優勝できないでいる。東北のチームで磐城高校は全国優勝に最も近づいたチームなのである。

磐城高校は福島県を代表する進学校の一つである。卒業後は大学へ進学するのが当たり前となっている。よく文武両道というが、磐城高校野球部は、これを実践している。高校のスポーツでは私立高校の活躍が目立つ。福島県の高校野球でも、学法石川高校、日大東北高校、そして聖光学院高校と甲子園出場校がそろう。

磐城高校は公立高校である。その意味でも甲子園での活躍を期待したい。高校には校訓や校是というものがある。校風もある。その高校に脈々と受け継がれてきたものがある。磐城高校野球部にも代々引き継がれてきたスピリット、魂のようなものがあるはずである。ぜひ甲子園でコバルトブルーのユニフォームとともに勇姿を見せてほしい。

一方、梁川高校の野球部は、現在部員は2名である。大会には、保原高校、福島南高校、川俣高校との連合チームで参加している。寂しい限りであるが、2名の部員は梁川高校野球部のスピリット、魂を受け継いだ大切な選手である。連合チームとはいえ、梁高らしさを発揮してこれからも頑張ってもらいたい。

高校野球のあのはつらつとしたきびきびとした戦いぶりは、いつ見ても感動を呼ぶ。勝っても負けても清々しさが残る。これからも大切にしていきたい文化である。